JICA帰国専門家秋田県連絡会会報

2009.3
No.25

国際交流 こまち ひろば

Contents

002 地盤災害に関する草の根技術協力事業に向けて
伊　藤　　驍

005 魚の取り方
伊　藤　晴　通

006 サウディ・アラビアの思い出（その１）
佐々木　久　尚

010 中国の山菜・雑草あれこれ
高　橋　公一郎

012 事務局便り

JICA帰国専門家秋田県連絡会

地盤災害に関する草の根技術協力事業に向けて

伊　藤　　驍
（JICA帰国専門家秋田県連絡会会長）

1．ネパールからインドネシアへ

ヒマラヤ山脈の南側にインドと中国にかこまれ日本の1/3程度の面積を持つネパールがあります。1993年、JICA地すべり派遣専門家として首都カトマンズにあるイシモド（ICIMOD：International Center For Integrated Mountain Development）に駐在し、ヒマラヤ地方の山地崩壊、地すべり防止と管理について日本がいかなる貢献ができるかを調査し、計画策定を行うという業務を遂行しました。この内容や成果は既に諸学会や本会の既報で報告しています。

自然災害でただならぬことは、世界の自然災害の60%以上がアジアで発生していることです。最近、私が訪れるインドネシアもネパールに劣らず災害大国です。インフラ整備が余り進まず、特に中山間地では災害疲弊が著しく地域住民の生活も貧しい。その典型は人口密度が高く土地開発の活発なジャワ島に多く見られます。この国で開かれる自然災害科学の国際会議や災害現地の視察に度々参加しましたが、その都度胸に強く迫るものがありました。この国の度重なる災害防止を何とか日本の技術力で手助けし、災害疲弊を乗り越えられないかとさらに強く思うようになりました。

2．インドネシアの地盤災害

インドネシアにおける地震や津波、地すべり、火山活動による世界的な災害をみるにつけ、何とかしなければならないという思いは年々強まり、その対策に手をこまねいておりました。５年前、私はインドネシア国立科学研究所（LIPI）の客員教授を拝命し、国内では日本地すべり学会の理事も拝命しておりました関係上、地盤災害の中で特に地すべり災害が顕著であることから、何度かプロポーサルを持ってJICAのJakarta Officeに足を運んだことがあります。こうした飛び込みをやるに当たり、インドネシア側では幾つかの複雑な関門（外務省、国家開発企画庁等）がありました。それをクリアーするにはこの計画はアサッテになる。この時、渡りに船というかバンドン工大（ITB）やLIPIから私に対して要請が舞い込んで参りました。そこで急遽思い立って、草の根技術協力事業のプロジェクトの応募に至った訳です。その間、インドネシアではアチェの津波やジャワ島の地すべり、火山活動が相次ぎ世界をとどろかせておりました。

インドネシアの地すべりに関して言えば、筆者はすでにこれまで幾つかの国際会議や国内の学会

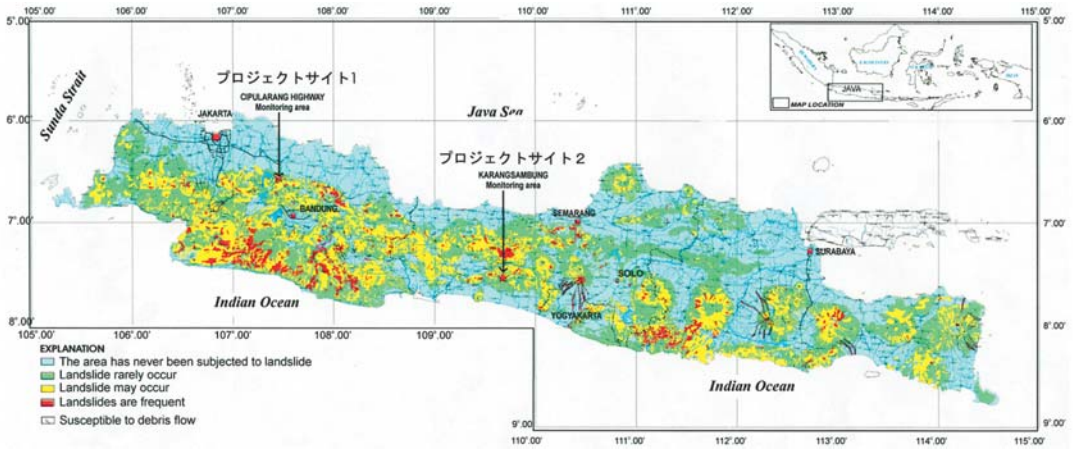


図１　草の根技術協力事業（ジャワ島）のプロジェクトサイト

で調査研究を発表しておりました。その中の代表例を末尾に掲げます[1)~5)]。

それによると、インドネシアの中で地すべり災害の約90%は首都ジャカルタのあるジャワ島に集中しています。図１は例えばジャワ島における地すべり発生頻度の分布図です。この図の赤い部分が発生頻度の高い所です。これを見ますと、インド洋に面した西部ジャワ州に最も発生頻度が高く、次いで中部ジャワ州、東部ジャワ州となっています。実は雨量の分布もこれに対応しています。いずれの地すべりも地震や火山活動に由来するものですが、雨期の集中豪雨が大きな引き金になっています。地質構造的にはフィリピンや我が国の地すべりと似た点があります。その点、日本の技術導入が容易なのです。構造線沿いの地すべりが多く、例えば写真１にはリニアメントに並ぶ温泉噴出群を示しました。地熱による粘土化した地盤と

写真１　構造線上の温泉噴出群

か、火山性たい積物が未圧密の状態で雨水を含み易い土壌が多いため、雨期に多く崩壊しています。概ね標高の高い谷地形やプランテーションの進んだテラス状地形から発生し、小河川を堰き止め、やがて鉄砲水となって泥流災害を引き起こします。いわゆる合併型災害が多いが、これらは少なからず人為的要因がからんでいるのが特徴的です。また、中にはカルデラの外縁から発した地すべりが、10km以上も下流にたい積し、数10mも高く積った土砂をみると砂漠の砂のように水を殆ど含んでいないラハール性の岩屑流である等、崩壊形態は様々です。しかし、八幡平や栗駒、鳥海山麓に見られるような融雪水でじっくり時間をかけて押し出してくるいわゆるクリープ型地すべりとか、強雨による突発的土砂崩れが目立ちます。

写真２～４はこれら地すべり・泥流災害の事例を示しております。

写真２　Mogolでの地すべり

写真３　Banjarnegaraでの地すべり

写真４　Rutengでの地すべり

今回計画している地すべりモニター設置箇所は、図１の中に矢印で示した２カ所ですが、そのうちプロジェクトサイト１の状況を写真５に紹介します。この写真を見ると地すべり地内に高速道路が走っています。しかも現在そこが動いているのですから大変やっかいな問題となっています。

３．草の根技術で防災教育

災害大国といわれる日本が災害疲弊を乗り越え、防災技術大国になった理由の一つは、災害に対する基盤研究がしっかりしていることでしょう。例えば秋田は雪国ですが、この雪に関連した学会だけでも２つあります。それに日本自然災害学会、日本気象学会、土木学会、日本地震学会、地盤工学会、地すべり学会、砂防学会、日本応用地質学会等々、自然災害と深い関わりをもつ学会は枚挙にいとまがありません。Tsunami, Sabo, Baiu等は国際語として定着しています。日本人は、自然を慈しむと同時に自然の怖さも学んできました。しかもそれを学問的に高め、災害の発生機構を解明し、防災・減災システムを構築し、さらに予知・予測技術へと発展させてきました。こうした自然災害に関わる専門家は日本が世界でも群を抜いて層が厚く、レベルも高いと評価されています。

しかしながら、発展途上国では防災情報が乏しく、災害が発生してもなかなか打つ手がありません。地盤災害に苦しんでいる災害弱者は主に中山間地の住民です。今回、草の根技術事業ではこうした地域に入り込んで地すべりモニターシステムの設置を行い、地域住民の防災コミュニテイの意識を高め、自分たちの生命、財産を自らの手で守るという防災教育も兼ねて行います。そのためには防災に関する体験教育が効果的であると考え、このシステムを地域皆で管理運営することによってその地域の発展につなげようとするものです。

他国で地域住民を動かすためにはその国の協力が不可欠です。ですからITBやLIPI等国の機関の若手技術者に日本の技術を先ず学びに来てもらい、帰国後それを地元に還元してもらう。その研修を向こう３年間いわゆる草の根の技術交流を通じて行います。その舞台となるのが秋田であり、秋田を日本の優れた防災技術の発信基地にしたいというのが今回の計画です。

参考文献

1）（Edited）：Proceedings International Symposium on Geotechnical Hazards；Prevention, Mitigation, and Engineering Response, LIPI-Indonesia, 403pp., 2006
2）Edi P. Utomo, Gatot M. Soedradjat & 伊藤　暁：2004年1月インドネシア・ジャワ島西部ジャワ州に発生したマジャランカ地すべり－岩屑流、㈱日本地すべり学会誌、Vol.41, No.1(159). 71-73, 2004.
3）Edi P. Utomo, Gatot M. Soedradjat & 伊藤　暁：ジャワ島中部カランアニャールで発生した地すべりについて、㈱日本地すべり学会誌、Vol.44, No.6(182). 75-77, 2008.
4）Takeshi ITO & Edi P. Utomo：LandslideHazards along the Tectonic Zone in Java Island, Indonesia：Proc. of the Int'l Conf. on Management of Landslide Hazard in the Asia-Pasific Region, Sensdai, 579-589, 2008.
5）伊藤　暁、Edi P. Utomo, & Gatot M. Soedradjat：インドネシア東部ジャワ州ジェンベル県で発生した地すべり及び泥流災害、日本自然災害学会誌、Vol.27, No.4, 363-374, 2009.

写真５　Jakarta～Bandung間の高速道路を横切る地すべり

魚の取り方

生和堂医院　伊　藤　晴　通
（パキスタン小児病院プロジェクトチームリーダー）
（モンゴル国母と子の健康プロジェクトチーフアドバイザー）

表題の「魚の取り方」とは国際協力の場ではかなりよく知られた言葉であると思われる。この言葉は大学の恩師に初めて教わった。技術移転という場でしばしばこのことを考えたものである。専門家の仕事は役務提供ではない、技術移転だ。とは当時しばしば言われたことである。まさにこの、魚の取り方を教えることだ。しかし当時の私のような若いチームリーダーには難しい課題であった。すばらしいお仕事をされている、諸先輩方には「え？どうして？」といわれそうなレベルの低い話かもしれない。しかしあのころは医療の分野では、国際協力の黎明期。毎日が手探りの状態であった。魚の取り方を教えるという原則さえ解っていれば、何も自分で教える技術が無くとも、環境を整えていくことで、その大目標に導くことができよう。それしかできなかったし、それで間違えてはいなかったと思っている。しかし、何と自分の力のなかったことよ。

国際協力、或いは技術協力の場に潜む陥穽の最も危険なもののひとつは、いわゆる途上国の人々が遅れているという誤解である。ある特定の技術を持ち合わせていないことがその人の全能力を低めることが無いのは、同じ日本人を考えれば当然のことであるが、途上国に専門家として赴任すると、それを忘れてしまいそうになる。我々はもっと、赴任国の人々の気持ちと能力、そして言葉の壁ということを理解する必要があるだろう。つまり、特定の技術がそこにないことで、最もフラストレーションを感じているのは、カウンターパートではないかと言うことである。それは彼らの怠惰でもなければ、無能力でもないはずだ。そのことに関する感情と言うところまで踏み込むゆとりはあの当時の私には無かった。途上国のカウンターパートでもやはり経験のある年長者を重んじることはとても大切である。

私の拘わった分野は新生児医療という、最先端で高額な医療の一分野であり、それを請われるままにそのまま途上国の環境に入れることは不可能に近い仕事であることが解ってくるのであった。社会インフラがしっかりしていないと、先端機器が使えないのである。電気のこないところで機械は使えないのだ。その環境にあったセカンドベストで代替したり、或いはむしろ、その環境下においては、古い技術の方がよい場合もある。魚の取り方はひとつではなく、何がベストということがないのと同じである。それぞれの民族には長い歴史が形成した固有の文化があり、現在のその国の有り様は選択圧力の中で様々な隘路をくぐり抜けてきた道筋の結果なのである。しっかりした技術と、広い視野が、そのような、持続可能な方法を発見できる基礎であろう。

ここ数年、医療分野で諸外国からの研修生に講義をする機会を戴いている。私からの最も大切なメッセージは、それぞれの固有の文化や伝統、価値観をもっと大事にしてもらいたいと言うことである。現在の日本の社会をみていると、もう良き日本は終わってしまったのではないかという思いがしてくる。今瓦解しつつある社会のセーフティネットとは、村の監視力といった様な簡単で即物的な面だけではなく、共存共栄の考えが必要と言うことではないだろうか。今大きな社会問題となっている、働きたくても働けない人々が、いずれ暴徒化し、隣人を襲うということがおきないような、共同体の形成である。それには人間のコミュニケーション力や、相互の信頼感の形成が不可欠であり、その根幹には自尊感情が不可欠である。国際協力の場で、道徳的な価値観はどこの国でもさして違いはないということを学んだ。それは、道徳というものが、人間の社会性に基づくルールだからであり、それはとりもなおさず、人間が社会的な動物であり、人との関係をうまく構築できなければ、生きていけないと言う事実につながる。勝ち組、

負け組などという言葉があってはならないのだ。それは国同士でも同じであろう。

今生まれ育ったこの秋田に帰り、町医者をしながら、漢方薬という数千年来の人間の貴重な財産に触れていると、そのような遠大なテーマに思いをはせることがある。

パキスタンで見た、人々の思いやりと助け合い。モンゴルのゲルと遊牧生活の究極のエコライフのすばらしさ。人類の英知が深遠なものであることを学ぶことができるのである。単純な物言いで誤解を招くかもしれないが、敢えて言えば、自由主義や、民主主義が一枚岩で、その方向性がひとつだというような単純な考え方は、不遜でさえあろう。先端機器などは単なる道具の域を脱していない。今人間に求められているのは、Homo Sapiensとして、技術に偏りすぎることなく、社会的な存在としての経験知の価値をもう一度考えなおしてみることではないだろうか。これからの国際協力は、お互いの真の意味での信頼関係から生まれてくるものであって欲しいと思う。

サウディ・アラビアの思い出（その１）

佐々木　久　尚
（西目町在住）

１．サウディ・アラビア王国を訪問した経緯

1973（昭和48）年の石油危機以来、わが国日本にとって世界最大の産油国であるサウディ・アラビア国から、原油の安定供給を図ることは不可欠のことであった。一方サウディ・アラビア王国も工業化推進政策に伴い、熟練および半熟練技術労働者の需要が急増した。また、ラジオ、テレビや電気通信分野においても、技術者の需要増が見込まれるため、電子分野における中堅技術者の養成の必要性から、わが国に技術協力を要請してきた。

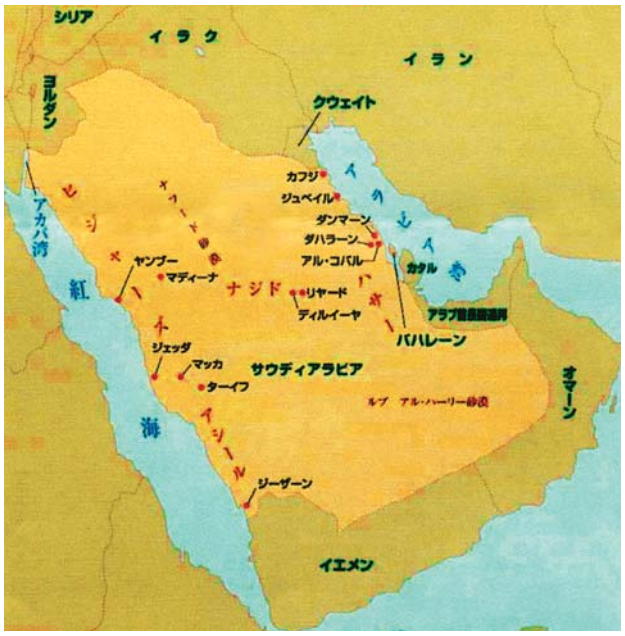
当時わが国の三木武夫総理大臣が湾岸諸国歴訪の際、サウディ・アラビア王国のファイサル国王との間で、昭和49年６月12日に取り交わされた協力関係（国家プロジェクト）である。外務省、文部省、国際協力事業団（現在の国際協力機構ＪＩＣＡ：Japan International Cooperation Agency）が主となり国内委員会が設置され、中堅技術者養成のための学校設立プロジェクト（日本式教育を導入した工業高等学校とし、「自動制御」「工業電子」「電気通信」「コンピュータ技術」「オーディオ・ビデオの５学科を有する、サウディ・アラビア・リヤド電子技術学院（Royal Technical Electronics Institute））がスタートしたのである。ただし、ファイサル国王が暗殺された際におよそ10年間停滞したが、湾岸戦争後このプロジェクトは再度復活したのである。

ちなみに、その際に同時にスタートした日本とサウディ・アラビアとの国家プロジェクトは12にのぼったが、最終的に完成まで達したのは、この「日本式教育を取り入れた工業高等学校の設立」と「海水からの淡水プラント建設」の２つだけで、他の10のプロジェクトは途中で消滅してしまったという。

私はカリキュラム上わずか一単位しか設けることができない一般科目の「化学」の導入のため、ディテールカリキュラムの作成、実験実習内容等についての指導のため、主都のリヤド市に派遣されたのである。今回は入国ができないサウディ・アラビア王国の概略について触れてみる。

２．サウディ・アラビア王国の位置

正式な国名でサウディ・アラビア王国（英語でKingdom of Sadi Arabia）という。世界地図を見るとアフリカ大陸の右肩に長靴の形をしたアラビア半島があるが、サウディ・アラビア王国はその半島の５分の４を占め。国土面積の2150千平方kmである。日本の約5.7倍の広さである。北はヨルダン（ジョルダンJordan）、イラク（iraq）、



クエート（Kuwait）と境界を接し、東はアラビア湾（ペルシャ湾 Arabian Gulf）上のバハレーン（Bahrain）、カタール（Qatar）、アラブ首長国連邦（the United Arab Emirates）と、東南ではオマーン（the Sultanate of Oman）と接する。西は紅海（the Red Sea）に臨み、南でイエーメン（the Yemeni Republic）と接している。しかし、未だにイエーメンやオマーンとの境界がはっきりしていないので、将来紛争の元になる危険性があるかもしれないという。

3．中東とは

中東（Middle East）という名称は、第１次世界大戦時にイギリスで生まれた用語で、ヨーロッパと極東（Far East）の中間に位置すると見たのである。歴史的にアラビア地域は文明発祥の地である。シュメールではアルファベットが生まれ、バビロニアでは法律の起源であるハンムラビ法典が作られた。エデンの園はイラクにあったといわれており、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教（イスラーム）の聖地も中東にある。

イギリスがオスマン・トルコを支配するオスマン帝国を援助した最大の理由は、ロシアが中東へ進出するのを封じる勢力と見たからである。19世紀が終わりに近づき、弱体化したオスマン帝国をアラブのナショナリズムが脅かし始めると、イギリスは小規模なアラブの王国に対し、威厳をもって支配していた王族とじかに交渉するようになった。第一次大戦中、トルコはイギリスとフランスに対抗してドイツに味方した。その結果、勝利をおさめた連合国はトルコ人をアラブ領土から追い出し、その地域をいくつかの国に分割してイギリスとフランスの統治下に置いた。

しかし、誤算があった。アラビアにおける石油の発見とパレスチナでのイスラエル独立問題である。特に1917年、イギリスの外務大臣アーサー・バルフォアは、アラブ諸国には独立を約束しながら、一方ではユダヤの財閥ロスチャイルド卿に「パレスチナにユダヤ人の故国を建設することに賛成」との手紙を書いた。このバルフォア宣言によりユダヤ人がパレスチナに移住するようになった。しかし、アラブ諸国はイスラエルの存在を認めず、アラブとイスラエルの戦争が何度も続いて起こった。1948年５月イスラエルが独立してからは、戦争は領土をめぐる争いになって行ったのである。

4．国土

国土の西部はハラスと呼ばれる溶岩台地で、紅海沿岸には3000mを越える山々が並び、東に向かって徐々に傾斜している。南部のルブ・アルハリ（Al Rub Al Khari）砂漠とネフド砂漠という２つの砂漠をはじめ国土の95％が砂漠である。土漠あるいは禿山からなる荒涼とした土地である。ちなみに砂漠はアラビア語でバーディアといい、北アフリカではサハラという。だから世界最大のサハラ砂漠は「砂漠砂漠」と呼んでいることになる。砂漠が砂とは限らない。デザート(英)やデゼル(仏)などにも砂の意味は含まれていないという。土でも岩でも、山でも谷でも、植物がほとんどなくて地肌の露出している自然を砂漠と呼ぶのが適切と思う。内陸部は日中の気温が45℃以上(50℃と表現する本も多数ある)になる高温乾燥地帯である。

また、アラビア半島には川が一本もない。ワジと呼ばれる「枯れ川」があり、雨が降ると一時的に水流ができるだけである。しかし、開発の進んだリヤド市の街中は、雨がほとんど降らない夏場（雨は冬にだけ降る）でも緑にあふれている。淡

水化プラントにより海水からスプリンクラーを通して水しぶきをあげ、緑の樹木や草花を潤している。そのせいかあるいは湾岸戦争の影響のためもあってか、最近では気象の変化が起こっているといわれている。

5．人口

サウディ・アラビアの人口は、1974年の第1回国勢調査を基に概数で表されていたが、1992年9月の第2回人口センサス（国勢調査）の結果、サウディ・アラビア人は1230.5万人、居住外国人462.5万人と発表された。1994年では総人口1780万人と云われた。首都は内陸部にあるリヤド(Riyadh)市で人口230万人である。ちなみにリヤドの人口推移は、1955年頃30万人、1970年代初め70万人、1984年180万人だから人口の伸び率がすごい。他に主な都市と人口は、ジェッダ（Jeddah）が150万人、マッカ（メッカMakkah今後マッカで統一する）が63万人、ターイフ（Taif）が41万人、メディナ(Madinah)が40万人、ダンマン(Dammaam)が35万人である。しかし、歴史をたどれば、マッカの玄関口として古くから栄えた西岸のジェッダや、石油の出現で突然膨れ上がった東岸のダンマン付近の方が現代に早く突入していた。

6．イスラム

サウディ・アラビアはイスラム教（イスラムという言葉の中に既に神の教えという意味が含まれているので、イスラム教という必要はないが…）の発祥地である聖地マッカ（メッカと言う人はいなかった）及びメディナを持ち、イスラム教を国教とする宗教国家であり、宗政一致の君主制をとっている。国王は立法・司法・行政上の最高権力者であると同時に、ワッハーブ派イスラム教のイマーム（スンニ派ではモスクの指導者、シーア派ではムハンマド（マホメッドといわないのでムハンマドで統一する）の正当な後継者という意味だが、一般的には最高指導者の解釈でいい）である。

マッカはムハンマド生誕の地で、イスラム教第一の聖地である。市街の中心部には150の丸屋根と7つの尖塔（ミナレット）を持つ大モスクがある。モスクの中心にはカーバ神殿（写真、中央の黒い布が掛けられた方形（長辺12m、短辺10m、高さ18m）の建物。もっと丁寧にいうと、神殿表面にはクルアーン（コーランより現地語に近いクルアーンで統一する）の言葉を黄金で書き付けた黒い布で覆われている）が据えられている。毎年多くの巡礼者がここを訪れる。特にイスラム暦12月7～13日に訪れることをハッジ（大巡礼）という。ハッジの最終日には300万人にもなる。毎年300万人もの人が、たった3日間のために終生お金を蓄えるという。直接マッカに行かない者でも、全世界のイスラム教徒（男のイスラム教徒をムスリム、女性のイスラム教徒をムスリマという）はマッカ方角に向けて毎日の礼拝を行う。国内ではイスラム教以外の宗教は、公的な活動を禁止されている。勧善懲悪委員会（ムタワ）と呼ばれる宗教警察が目を光らせ風紀の維持に当たっている。リヤド市内をパトロールするライトブルー色の自動車が、日本のパトカーのように街中を走り回っている。怖くてパトカーを写真に撮ることはできなかった。もし見つかるとカメラの没収は当たり前で、ムチ打ちや国外追放させられるという。イスラム教徒の5つの義務については後述する。

日本との時差は6時間でモスクワと同じ時刻で、日本の正午はリヤドの午前6時である。

7．国王

国王について触れる。アブドゥル・アジス・イブン・アブドゥル・アル・ラハマン（いわゆるイブン・サウド）初代国王（1880～1953年）が国家統一したのが1927年5月20日である。現在のサウディ・アラビアという国名を宣言したのは1932年9月22日である。サウディ・アラビアは「サウド

家のアラビア」という意味である。ちなみにヨルダンの国名は「ハシム家のヨルダン」、アラブ首長国連邦（UAE：United Arab Emirate）など家や首長は部族と考えればよいそうだ。第一次世界大戦（1914〜1918年）中、アラビアのロレンスの活躍で有名な「アラブの反乱」により、ハーシム家はアラビア半島に王国建設の野望があったが、内陸部勢力のサウド家の攻勢に崩壊した。

イブン・サウド王（19人の妻、36人の王子を含む58人の子どもがいた）の息子達が代々国王に就いている。第２代サウード国王、第３代ファイサル国王、第４代ハーリド国王、第５代ファハド・ビン・アブドル・アジス・アル・サウドで、現国王は２歳年下（1923年生まれ）のアブドーラである（写真は左からファハド前国王、イブン・サウド初代国王、アブドーラ現国王）。2009年現在、現国王の年齢が86歳である。高年齢なので次世代への交替が話題になるのも近いと思う。

ちなみに、第５代ファイサル国王の正式な名称は、ファイサル・アブドル・ラーマン・アル・サウドである。あまりにも長いので通称ファイサルと呼んでいる。アブウ…父、ウム…母、イブン…息子、ビン…娘をつけて呼ぶこともある。

８．国旗とサウド家のシンボル

サウディ・アラビアの国旗（上）の緑色は、植物が育つ草原をイメージしており、その中心にはアラビア語で「アッラーのほかに神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒である」と右側から左側に書かれている。その下の剣は悪に屈しない正義を表わしている。国旗にこれだけたくさんの文字が書かれているのは珍しい。旗全体でイスラム、正義、繁栄を表わしている。

また、サウド家のシンボル（左）は、ナツメヤシの木と正義を表わす剣をデザインしたもの。ナツメヤシの木はサウディ・アラビア王国の繁栄のシンボルである。ナツメヤシの実はデーツといい砂漠の民（ベドウィン）にとっては、保存がきき栄養があり大切な食べ物でる。私も時々食べたがとっても甘く干し柿のように感じた。

９．教育

サウディ・アラビア王国は第３代国王のファイサル以来教育に熱心である。ファイサルは英明の誉れが高く人望が厚く名君といわれた。国民はこの時代をゴールデン・エイジと呼び近代国家としてスタートさせた。特に国を近代化にするために教育に大変力を入れ、教育予算が国家予算の10%にもおよんだ。現在の国王もその意思を尊重し教育に力を注いでいる。

教育制度は1958年に採択されたアラブ連盟加盟国の統一学校制度に従い６・３・３制が採用されている。義務教育がないことと公立学校の授業料や学用品は無料であることが特徴。ただ日本と異なり男女が別々に学ぶ。授業は土曜〜水曜日で、金曜日が休み、木曜日には通常の授業はなく、教師に質問したり、スポーツに励む日となっている。外国語教育に特に力を入れており、生徒は英語やフランス語を流暢に話すことができる。特に校則がないため男子生徒は自由な髪型や服装をしている。学年が進につれて伝統的なトウブを着用したりひげを蓄える生徒が目に付く。学期は２学期制をとり新学期は９月に始まる。

中国の山菜・雑草あれこれ

高　橋　公一郎
（中国語通訳案内士）

私は毎日何らかの運動で汗を流さないとすっきりしない。農作業、テニス、サウナそれに山菜採りなどなどだ。25歳から対中国国際協力に従事して34年、そのうち17年間は大陸で生活したが、郷里横手と中国を行き来してつくづく感ずるのは、森林率70%と世界一を誇る日本の自然の豊かさだ。特に雪深い東北の日本海側の山野は肥沃で山菜の宝庫、在宅時は春から雪が降るまで暇を作っては山に入るのが楽しみだ。

中国はあれだけ広大な面積（日本の26倍）を持ちながら人口も13億と巨大で、人が住んでいるところのほとんどは農業用地として開発され尽くされており、山菜採りができるような自然は極めて少ない。

ウド、ゼンマイ、ワラビ、セリ、フキノトウ、コゴミ、タラの芽、スギナ、イタドリ、ドクダミなどは日本の山野のどこにでもあり、特にスギナ、ドクダミ、イタドリは生命力が強く厄介な雑草だ。ところがこの34年間、私が中国各地を回った際、未だに眼にしたことがないのは、ウド、フキ・フキノトウ、イタドリだ。日本は大陸の辺縁にあるので、もとの植生は同じだったはず。もともと原野や山野にあった木や草が、開墾と作物栽培で何百回何千回と掘られ除去されているうちに生えなくなってしまったのか？今でも、不思議だ、おかしい、きっとどこかにまだ生き残っているはずだと思っている。スギナ、イタドリ、ドクダミ、フキなどはみんな根の深い植物なので、砂漠化が進む中国の国土に根付いたらどれだけいいか。

1981年、杭州の龍井（ロンジン）茶の本場である九渓という清流に生えている野ゼリを発見。セリは蔬菜として中国ではほとんど見かけたことがない。

1983年ごろ、四川省峨嵋山山麓の農家の畑でミョウガと思われる作物を見た。それ以降ミョウガは見たことがない。あれは、ミョウガではなくショウガだったかも？

ドクダミは南方で野菜として栽培されている。日本のと比べてモヤシのように細いものだった。炒めてたべるらしい。野生では見たことがない。

ワラビは全国どこにでも生えているが、中国は山には土葬の墓が多く、痩せワラビがそういうと

ゼンマイ干し

コゴミ

ころに生えているので、1990年ごろ江蘇省無錫あたりでは山菜としては採られていなかった。その後、2000年以降滞在した吉林、黒龍江省辺りでは料理に盛んに使われていた。ただし、痩せワラビで粘りなし、しかもあく抜きをしないので、日本人にとってうまいものではない。

2007年北朝鮮国境に近い吉林省の長白山山脈の裾野で仕事する機会があり、そこの市場で豊富な山菜に出合った。秋田県の何倍もある山地はほぼナラの再生林で覆われており、白樺も多く、落葉松（カラマツ）が山裾に植林されている。中国各地で禿山を見慣れた私には新鮮な驚きであった。山に木があれば山菜が豊富なのにもうなづける。市場には、ワラビの他、細いタラの芽、シドケ、コゴミも出ていた。食卓にタラの芽やコゴミの天ぷらが出ると、日本人は大喜び。ゼンマイ、ワラビは、日本では見かけない茎に細毛の生えたものであった。ゼンマイは日本と同じ赤ゼンマイと青ゼンマイの２種、茹でて干して揉むと毛は取れてしまうので製品になれば見慣れたゼンマイとなる。

ここの山奥の大豆畑に痩せたスギナがまばらに生えているのを発見した時は嬉しかった。やっぱりあったかという思い。

これからはいつの日か、中国に残る数少ない原生林、長白山山脈、大小興安嶺、雲南省・四川省からチベットにいたる渓谷地帯に入って山菜採りをしてみたいものだ。また、ロシア沿海州の手付かずの原生林も見てみたいものだ。シベリアタイガーとヒグマに気をつけながら。

タラの芽

シドケ

スギナ

事務局だより

平成19年11月10日㈯　平成19年度JICA帰国専門家連絡会東北ブロック会

当会が当番となり平成19年度JICA帰国専門家連絡会東北ブロック会が秋田市の協同社大町ビルで開催され、JICA東北および東北６県の連絡会が参加しました。

JICA東北からJICAの今後の方針に関して説明があり、その後に各県の連絡会から質疑応答がありました。また、各県の活動の状況ならびに抱えている課題について活発な討議がなされました。さらに秋田県の帰国専門家から「トルコでの医療支援活動状況」（森田盛大）および「ヒマラヤ周辺の地盤災害と技術協力」（伊藤　暁）に関する活動事例報告がなされました。詳細は帰国専門家秋田県連絡会のホームページ（http://www.med.akita-u.ac.jp/~doubutu/jica/event19.html）に掲載しています。

平成20年６月21日㈭　平成20年度JICA帰国専門家秋田県連絡会総会

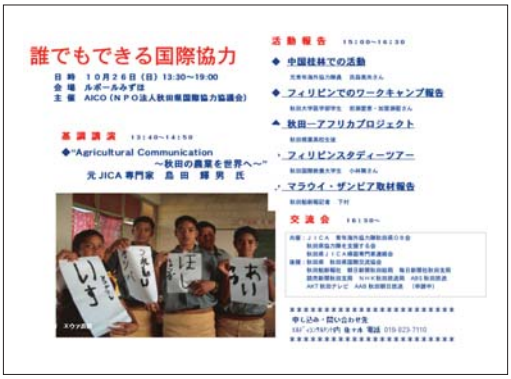
平成20年度の総会がルポールみずほで開催されました。JICA東北からは高城連携推進チーム長にご参加いただき、JICAの今後の方針についてお話しをうかがいました。

平成19年度の経過概要報告ならびに会計／監査報告がなされ承認されました。

20年度の活動計画としては秋田県国際協力会議（AICO）と協力して実施することとなりました。

平成20年10月26日㈮　誰でもできる国際協力

AICO（NPO法人秋田県国際協力協議会）との共催で標記の講演会が秋田市のルポールみずほで開催されました。基調講演として元JICA専門家の島田輝男氏をお招きし「Agricultural Communication～秋田の農業を世界へ～」をご講演いただき、また以下の活動報告がなされました。



＊中国桂林での活動（元青年海外協力隊員　貝森さん）

＊フィリッピンでのワークキャンプ報告
（秋田大学医学部学生　岩瀬さん、加賀瀬さん）

＊秋田－アフリカプロジェクト　（秋田商業高校生徒）

＊フィリッピンスタディーツアー　（秋田国際教養大学生　小林さん）

＊マラウイ・ザンビア取材報告　（秋田魁新報記者　下村さん）

JICA帰国専門家秋田県連絡会報　第25号

発行　2009年３月　　発行責任者　伊　藤　　暁
編集責任者　松　田　幸　久

JICA帰国専門家秋田県連絡会事務局（松田）
秋田大学バイオサイエンス教育・研究センター
秋田市本道１－１－１　TEL　０１８－８８４－６１９５

JICA帰国専門家秋田県連絡会ホームページ
http://www.med.akita-u.ac.jp/~doubutu/jica/index.html
印刷所　㈱東海林印刷